Osaka University Knowledge Archive

Title	＜書評＞ 川村邦光『弔い論』
Author(s)	丸山, 泰明
Citation	日本学報. 2014, 33, p. 231-237
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/27043
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

書評：川村邦光『弔い論』

丸　山　泰　明

いうまでもなく書物のタイトルはその内容を象徴するものだが、本書が『弔い論』と題していることにまず着目したい。『慰霊論』や『追悼論』ではないのである。弔いという言葉を据えたことによってより明確になったのは、主体と客体との関係性である。著者は、序章の「弔い論へ向けて―誰が死者を弔うか」において、その死を悼み、喪にある遺族を慰め、野辺送りをするという意味をもつ弔いの語源をさかのぼり、弔う（とぶら）／訪う（とぶら）（ふ）の変化した語であることを指摘し、その原義から弔いの本質を探る。すなわち、弔いとは死者やその遺族を訪ねる（尋ねる）ことなのである。そして訪ねる側は贈り物をしなければならず、訪ねられた側は歓待しなければならない。贈り物は物品である供物だけでなく、弔いの物語である文学や碑なども贈り物となる。訪ねるのは生者だけではない。死者もまた亡霊となって、家族などの親しい人に、あるいは恨みを晴らしたい憎むべき人のもとに訪れる。まるで関係のない人を訪ねることもある。このような相互的な交歓の場として弔いがあることが確認される。

本書において取りあげられている死者は、早逝した幼子の死者であり、そして近代に日本が行なった戦争により命を失った戦死者である。したがって本書は弔いの一般論を語るものではない。また、単に他の国や民族とは異なる日本人の霊魂観を明らかにする、といった日本文化論を展開するものでもない。焦点があわせられるのは、死者を弔い、亡霊を語る実践であり、その意義と（不）可能性が検討されるのである。

戦争と戦死者の記憶をめぐっては、アカデミズムの世界だけではなく、一般のマスメディアやジャーナリズムにおいてもさかんに語られてきた。議論の中心のひとつとなったのは、戦死した日本人の軍人を祭神として祀る靖国神社である。1975年に三木武夫首相がはじめて８月15日に参拝して以来、毎年８月になると政治家の靖国神社参拝が世論をにぎわせるようになったが、2001年から2006年にかけて在任中の小泉純一郎首相が参拝するようになると、国家と靖国神社の関係をめぐる議論があらためて活発になされるように

なった。これらの議論の多くでは、あることが無意識のうちに前提になっている。それは戦死者、とりわけ靖国神社に祀られている戦死者の霊は、安らかに眠っているとされ、いわば無害な存在と見なされていることである。しかし、本書に登場する死者の霊はそうではない。未婚のまま天寿を全うせずに死に、あるいは戦争によって殺されたがゆえに、亡霊となって姿を現し、この世の生者に病気や事故などの災厄をもたらしかねない、激しくあらぶる霊としておそれられる存在なのである。

生者と死者が、それぞれ訪ね／訪ねられることによって弔いの場は生まれるが、その場は予定調和的にお互いを理解し和解する場では必ずしもないことを、著者は本書の中で表現を変えつつくりかえし指摘する。たとえば序章では次のように述べている。

> 亡霊に訪れられた者は、わかりあえるといった情緒的・理性的な関係をいったん前提にしないで、この異質の他者に向かい合わなければならなくなる。理不尽さを強いられながら、新たな関係性を切り開いていくことが求められる。すなわち、亡霊の側に身を置いて、その語りを聴き、記録すること、記憶すること、いわば亡霊とともに生きることが要請されるのである。（中略）亡霊の呼びかけに絶えず応え、亡霊の語りを記憶にとどめていくことが、訪れられた客体、もしくは歓待する主人の位置に身を置く生者としての営みとなるだろう（28頁）

したがって、弔いは失敗に終わることもある。だが著者は「常に未完のまま継続を余儀なくされ、生者が死者の経歴もしくは歴史をともにせざるをえないのが弔いの宿命なのではないか（44頁）」と提起し、弔いの未完成・不可能性こそが、たえず亡霊の傍らに寄り添いながら、呼びかけ、その語りを聴き、応え、記憶していく営みを要求するのであり、生者と死者の関係性を築きなおし、未来を構想していく歴史の力を更新するのだと主張する。死者をおそれつつどのように弔ってきたのか、そして失敗し不可能でありながらも、なぜ弔わなければならないのかを明らかにすることが、本書のテーマだといえよう。

序章での弔いとは何かについての検討を踏まえて、本書では各章で以下の議論が展開されていく。第１章の「幼子の死と弔い―子どもの近代と生死の諸相から」では、近代日本における戦死者の弔いを考察する前段階として、近世から近代にかけての病気や事故などで死亡した子どもの弔いの変容について検討されている。

近代以前には、子どもの葬送の多くは、家でひそかに行なわれて戒名もつけられず、その遺体は成人の遺体を埋葬した場所ではなく床下や軒先、便所などの家の周辺に埋葬された。埋葬も単に盛り土をしただけで、墓標が建てられないこともあった。このような葬送・埋葬が行なわれたのは、子どもが地域社会の正式な成員ではないためである。他方で子ど

もの死者は、成長して一人前になり所帯をもって家を構え生をまっとうすることができなかったことから、病気や事故などの災いを及ぼしかねない恐怖の対象として特異な供養・弔いが行なわれた。東北地方ではハナ寄せやナナクラ寄せといって巫女によって霊を呼び寄せる口寄せが行なわれた。あるいは、あの世で結婚させるために、婚礼の光景を描いたムカサリ絵馬が寺社に奉納された。

しかし、近代になると子ども観は大きく変容し弔い方も変わる。フィリップ・アリエスが『〈子供〉の誕生―アンシャン・レジーム期の子供と家族生活』（みすず書房、1980年）で指摘したように、子どもを純真無垢な守り育てていくべき存在として家庭の中心に据える転換がヨーロッパで起こる。日本でも翻訳によって同じような事態が起こったことが若松賤子や幸田露伴の言説を分析しながら述べられる。その上で、子どもを亡くした親たちによる追悼の手記や短歌を収めた『子を喪へる親の心』（村田勤・鈴木龍司編、岩波書店、1937年）を中心的な資料として、子どもの喪失を親がどのように受け止め納得していったのかが分析される。この本には編者の村田自身がキリスト者であることから、キリスト者の安部磯雄、土井晩翠・八枝夫妻、内村鑑三といったキリスト者、仏教者の近角常観、高楠順次郎、多田鼎などの仏教者、宗教哲学者であった西田幾多郎の文章が収録されている。手記は、子どもを失いただ悲嘆にくれるタイプの文章とともに、子どもの死を契機として信仰にあらためて目覚め、あるいは天国や浄土という救済の地を認識し確信して信仰を強化していくタイプの文章にわかれるという。信仰を理由に迫害される者や殉教者がほとんどいなくなった近代では、子どもが純粋無垢な存在として発見され、親を信仰へと導き、親を贖罪する「犠牲」とする語りとなっていたのである。死者を美化し親や家族のための犠牲になったとする「自己充足的な自己弁明・正当化のディスクール（107頁）」は、戦死者を国家や世界、人類の高みにまで飛躍する「かなり欺瞞にみちたものへと転換するおそれもなくはなかった（同前）」とその危うさを指摘する。また、自己充足的な語りについて、著者は「死者を想起し、苦痛を絶えず抱え込んでいくという、弔いの作法を裏切るものとなりかねないのではないだろうか（104頁）」と疑問を呈している。それは今日でも通俗的にいわれる、戦死者の犠牲によって今の日本があるというような語りへの批判的な問いかけでもあろう。

第２章の「戦死者の霊と弔い―折口信夫の弔いの作法から」では、折口信夫の戦中における戦争への協力と戦後の身の処し方が、養嗣子の折口春洋（藤井春洋）の弔いを軸にして論じられている。戦中、折口は、現実の戦争を日本の古代神話の戦いになぞらえ、文学者として詩をもってこの戦争を言祝ぎ、また、1943年４月に靖国神社の臨時大祭に参列した際には戦死者を新たな神として合祀する招魂式に感銘を受けていた。しかしながら折口は、1945年の硫黄島の戦いで戦死した春洋に関しては「我が子の春洋が戦死して靖国

の神となることは望みもしなかった（171頁）」としている。そして戦後の1948年に墓石を選んで「もつとも苦しき　たゝかひに最苦しみ　死にたる　むかしの陸軍中尉　折口春洋　ならびにその　父信夫の墓」と彫り、1949年に春洋の郷里である石川県に建てた。「靖国の神として祀られるよりも、春洋の故郷、能登の日本海に面した地に、その霊をひっそりと弔うことをよしとしたのだろう（174頁）」と建立の意図を推察する。さらに1952年に発表した論文「民族史観における他界観念」を読み解きながら、この論考が「完成した霊魂」とともに、「死が不完全」であり「年齢不足の為に資格の欠けた霊」である「未完成の霊魂」の二つの霊魂概念にわけていることを提示したうえで次のように述べる。

> この「未完成の霊魂」の概念は〝聖戦〟を引きずっていこうという決意だろう。また〝聖戦〟と靖国神社の招魂式参列に対する自己批判的な総括でもあった。それとともに、春洋も含めて、靖国神社に回収された戦死者の霊を前にして踏みとどまり、それらの霊はいまだどこにも救済されていないのではないかと、ただ一人であらがっていこうとして、自己に課した問題だったのではないだろうか（178頁）。

このように、戦後の折口は靖国神社を拒絶していたと著者は結論づけている。だが評者は、折口による春洋の弔いをめぐっては、異なる論点もあるのではないかと考えている。著者は言及していないのだが、折口は春洋の墓を選んだ1948年に「鎮魂頌」という歌をつくっている。後に「海ゆかば」の作曲者でもある信時潔によって曲がつけられた「鎮魂頌」は、その一節に「この国を　やす国なすと／あはれ　そこよしや／神こゝに　生まれたまへり」とあるように、戦死者は国を安んじた存在（やす国＝靖国）であり、戦死者が神として生まれたことを静かに讃えている（『折口信夫全集』第26巻、中央公論社、1997年、381頁）。また、著者は「民族史観における他界観念」に言及しながら「折口は『三界に遍満する亡霊』『無縁万霊』『神となれない、行くへなき魂の、永遠に浮遊するもの』をどのようにあつかうのかについて、『近代神学』の明治神道は無視してきたと批判する（175頁）」と述べている。しかし、実際には折口は、1951年に行なった講演「新神道の顕現」で、靖国神社を「明治神道の曙光」として位置づけ、「靖国神社の持つ明治神道の大きな暗示は、日本神道の大きく持つ霊威信仰―鎮めて差し上げなければすまない霊魂があり、其を慰めるといふところに敬虔な意味がある」と新しい神道のあり方として肯定的・積極的に評価しているのである（『折口信夫全集』第36巻、中央公論新社、2001年、394頁）。折口は靖国神社にまったく距離を置いていたのではなく、むしろ靖国神社という戦死者を神として祀る神社があることを一方で認めつつも、なお父として子の春洋の苦しみを抱きつつ弔おうとした。そこにこそ、折口の弔いの特質があると評者は考えている。

第３章の「戦死者の亡霊譚と弔いの視座」では、戦死者の霊魂が成仏できずに亡霊となってこの世に訪れる亡霊譚が取りあげられる。第１章と第２章が、子を喪った親の側、つまり生者の側がどのように死者に向き合い弔うのかを取りあげたことに対して、この章は能動的に先に訪れ呼びかけるのは死者であり、亡霊の訪れにどのように生者は向き合い弔ってきたのか、そして民衆が生活の場において民話というかたち戦死者の亡霊譚を語り伝え、語り継ごうとする企図と意思にどのような民衆の思想が込められているのかが論じられる。

松谷みよ子の編集による『現代民話考』のシリーズに収録されているものを中心にして亡霊譚を紹介しながら、靖国神社に祀られているはずの戦死者も安らぐことができず亡霊となって訪れていることを指摘している。また、日本人の戦死者が戦地をさまよいつづけ、中国人の戦死者が国境を越えて日本に訪れるように、亡霊がトランスナショナルな存在であることが述べられる。著者が特に注目するのが、亡霊に出会ったり襲われたりした人たちが特異な身体感覚に襲われる話である。1955年にビルマに訪れた元兵士に骨と皮だけでボロボロの服をまとった戦友に襲われ、それ以来寝ては夢にあらわれてうなされた話。敗戦後にルソン島の捕虜収容所で、夜な夜なあらわれる敗走して逃げ遅れたために見捨てた従軍看護婦の亡霊にうなされて苦しめられた話。中国人の捕虜を初年兵の銃剣術の稽古に使ったところ、その夜に胸を圧迫されてうなされ、朝になっても左胸が痛み、捕虜の恨みによるものか、銃剣術の教官が数ヶ月後に亡くなった話。南京大虐殺にかかわった元兵士のクリーニング屋が帰国後に夜手洗いに立つとガラス戸に次々と亡霊がうつり、気が変になって精神病院に入院して亡くなった話。うなされ、刺した左胸が痛み、気が変になるといった身体的・精神的な苦痛は、「亡霊のシグナル」であるとしている。ここで注意しなければならないのは、苦痛を単なる亡霊が訪れた徴候としてだけ見做しているわけではないことだ。苦痛を感受し亡霊を受入れ対応していくことが弔いの始まりになるのである。著者は「生者は自ら異界へと巻き込まれていくことによって、痛みの身体感覚を体験して共有し、亡霊の来歴を記憶する身体となって、亡霊の異界からこの世の日常世界へと帰還していくことになる。亡霊のシグナルを感知し、その訪れを身体を開いて迎え入れ、亡霊の痛みに感応して、その語りを耳を澄ませて聴き取り、亡霊の宿る異界を体験すること―それが弔いとなるだろう（256頁）」と述べる。そして「この国だけでなく、殺戮された中国人なども含めた、戦死者の亡霊譚は、戦中から敗戦後につづけられた排他的な国家的儀礼・言説に対して介入する、対抗的な言説・歴史的な実践の所産であり、いまもなお証言として語りつづけるに値する貴重な物語なのではないだろうか（257頁）」と提起する。確かに（著者も断っているように）亡霊は生き残った者の負い目による妄想の産物かもしれないが、亡霊の出現とそれを語り継いでいくことこそが公的な記録や儀礼によって沈黙

を強いられ、すり替えられ、隠蔽され、遺棄され、忘却されてきた歴史と記憶にあらがい、もうひとつの歴史と記憶を想起し死者を弔う営みとなる。そう主張する論考として、評者はこの章を読んだ。

第４章「亡霊と生き残り、そして未完の弔いへ」では、国境を越えて戦地をさまよい、そして他国から日本に訪れる亡霊を弔うことが、一国に自閉しないトランスナショナルな戦争の記憶を形成していく契機になる可能性があることが論じられる。そのために参照されるのが、メアリー・ルイーズ・プラットが『帝国の眼ざし』（*Imperial Eyes: Travel Writing and Transculturation*, Routledge, 1992）において提起する「接触領域（コンタクト・ゾーン）」の概念である。戦場における加害と被害、支配と非支配という関係性が埋め込まれた生者による死者の弔いや亡霊の出現というかたちの接触も、接触領域のように異なる民族同士の植民地的遭遇の空間と同じように暴力的な政治や根源的な不平等といった非対称的な権力関係を常に含んでおり、相互行為的・即興的次元のなかでそれぞれの主体が動態的に構築されていくからである。

さらに著者は、プラットの接触領域の概念を援用したジェイムズ・クリフォードの論文「接触領域としてのミュージアム」（『ルーツ―二十世紀後期の旅と翻訳』所収、月曜社、2002年）を参照する。帝国はその版図を拡大するにあたって、被植民者や先住民族を抑圧・搾取し、「保護区」に強制移住させて隔離し、文化を奪って同化し、いずれ滅んでしまうものとしてきた。そしてそれらの人々が使っていたモノは版図拡張の成果・シンボルとしてミュージアムのコレクションとなって収集・展示してきた。しかしながら今日ミュージアムは、かつて滅ぶべきものとされた被植民者や先住民族の人々が祖先たちが使っていたモノに接して自分たちのかつての文化を学び復興していく場にもなっている。そしてまた植民者であるかつての帝国の人々やミュージアムのキュレーターたちも、被植民者の子孫たちとの対話と交流を通じて、自らの支配・暴力の歴史を批判的に問いなおす。このような接触領域としてのミュージアムのような場が、亡霊と接触する弔いの場においても成り立ちうるのではないかと著者は述べる。

他の章が、民俗や民話、書物や新聞記事、文学や詩などにもとづきながら考察が深められているのに対し、この章では具体的な例がほとんど取りあげられない。そのため、文章から著者の強いメッセージを受取ることはできたが、クリフォードの論文名を捩れば「接触領域としての弔い」とでも名付けられると思われる場は具体的にどのようなものなのかはわかりにくかった。前章の冒頭で紹介されている辻まことの「山賊の話」や、2004年の台湾先住民による靖国神社から祖霊を奪還する儀礼の執行計画、中国人の亡霊譚は、「接触領域としての弔い」を示唆するものかもしれないが、そこでどのようなことが成し遂げられ、そこにはらまれる政治性はどのようにものなのかを論じていくことは、いまだ死者

に寄り添いその語りに耳を澄ませようとする者に与えられた課題だといえるだろう。

幼子の弔いからはじまり、戦死者の弔いと亡霊譚を論じてきた本書は、終章の「亡霊と弔い、そして和解、もしくは逡巡」において、能の「八島」「忠霊」、目取真俊が1997年に発表した沖縄戦をめぐる亡霊の訪れを描いた小説である『水滴』（文藝春秋）の考察をへて、家族写真と弔いの関係が取りあげられる。「肖像写真や家族写真であれ、プリクラであれ、さらには風景写真であれ、写真はすべて遺影なのであり、たえず〝遺影の故人史〟の語りを喚起してやまないといえる（331～332頁）」という印象的な言葉が掲げられる。そして2011年３月11日に起こった東日本大震災の津波によって流された家族写真を探し求めた人々や、破損し汚れた家族写真を修復・洗浄するボランティア活動について新聞記事にもとづき考察しながら、我々が日々何気なく行なっている、家族写真を撮り、眺める営みが、実は〝遺影の故人史〟を紡ぎ出すものであることを指摘し、弔いにおける写真の介在という問いの地平を展望して本書は結ばれる。

以上のように本書は、生者と死者がそれぞれ訪ねる／訪ねられる弔いについて論じるものであるが、では第三者である研究者はいかなる存在として弔いの場に立ち会うことができるのだろうか。この点について著者は「伝承―解釈者」というポジションを提示している（264頁）。亡霊について論じる研究者は物語の伝承者と同じ立場にあるともいえるが、異版をつくるのではなく、解釈するに過ぎないからだ。そして「亡霊が生者の日常世界に亀裂を入れて、異界を構築し、亡霊譚を生成させる場を出現させる」ように、伝承―解釈者は「亡霊と亡霊譚を再現させる場をあらためて設定し構築する〝亡霊的な存在〟」であると位置づけている（264頁）。夢幻能では死者の亡霊が、第三者である旅をする「諸国一見の僧」のもとにあらわれ、そこから物語が始まるのだが、このような亡霊の救済を媒介する「諸国一見の僧」のような立場が伝承―解釈者としての研究者としての立場に重なりあうとしている。このような思考からとらえるならば、本書もまた、今日まで続く国家的な戦争の記憶と戦死者の弔いに介入し、対抗的な物語と思想をつむぎだしていく技法について論じるものであり、この意味で〝亡霊的な書物〟だといえるだろう。

（まるやま　やすあき）